

## 15. スポーツダイバーの高気圧障害に関する実態調査

芝山正治\*<sup>1)</sup> 山見信夫\*<sup>2)</sup> 中山 徹\*<sup>2)</sup>  
 高橋正好\*<sup>2)</sup> A.M.Sera\*<sup>2)</sup> 眞野喜洋\*<sup>2)</sup>  
 (\*<sup>1)</sup>駒沢女子短期大学  
 (\*<sup>2)</sup>東京医科歯科大学医学部)

スポーツダイバー人口は現在30万人とも40万人とも言われている。その中、減圧症や肺破裂などの生命に係わる障害や耳及び副鼻腔の障害などの比較的に軽度の高気圧障害の罹患の実態は、病院などで受診したケースの報告がほとんどであり、ダイビングスポットに出向き直接ダイバーに問診した報告は少ない。

我々はスポーツダイバーがどれだけの頻度で高気圧障害の罹患経験があるかを調べるため、ダイビングスポットに出向き、問診による調査を行ったのでその結果を報告する。

**【方法】**調査が行われたダイビングスポットは、関東周辺にあり、静岡県の大瀬崎(西伊豆)、赤沢(東伊豆)、菖蒲沢(東伊豆)、海洋公園(東伊豆)及び神奈川県の実鶴の5カ所である。

問診項目は、年齢、性別、認定書の有無及び種類、潜水経験、障害の経験など計58項目である。

対象は、ダイビングスポットで潜水を行っているダイバーを無作為に抽出して行った。この中にはスポーツダイバー、インストラクター及び水中カメラマンなどが含まれていた。

**【結果と考察】**調査例中の高気圧障害経験者は42%であった。障害の頻度は、1位が耳の障害、2位が窒素酔い、3位が副鼻腔の障害であった。

年齢と障害経験の関係は、20歳代までの経験率が70%を超えたのに対し、35歳以上の経験率は30%前後と、若いダイバーの方が高い割合で障害を経験している結果が得られた。

また、潜水経験においては、講習中に耳の障害を経験したり、ダイビングショップのツアーへ参加中に減圧症を経験したり、潜水経験が浅いダイバーにも障害の経験者が多く含まれていた。

## 16. DAN-Japan システムについて

眞野喜洋\*<sup>1)</sup> 芝山正治\*<sup>2)</sup> 中山 徹\*<sup>1)</sup>  
 山見信夫\*<sup>1)</sup>  
 (\*<sup>1)</sup>東京医科歯科大学医学部保健衛生学科  
 (\*<sup>2)</sup>駒沢女子短期大学)

日本に於ける潜水障害の緊急連絡網として、本年2月16日より、DAN-Japan がスタートし、潜水後の減圧症に罹患した場合の緊急医療相談システム活動が開始された。

この制度は米国に於ける DAN システムと互換性のある制度となる予定である。まず、日本近郊のスポーツダイバーが、減圧症に罹患して、電話による相談が生じた時のホットラインの開設からスタートし、本年4月以降徐々に電話による緊急医療相談が実行に移された。

海上保安庁がバックアップし、業務主体は財団法人沿岸レジャー安全振興協会が行うが、ホットラインサービスに関しては、東京医科歯科大学附属病院が対処に当たる事となった。

潜水の現場で減圧症に罹患し、緊急を要する場合、ホットラインに電話すると、担当者にその回線が直接つながり、治療を要するかどうか、どの様な対処が望ましいかを検討し、最寄りの医療機関を紹介する。前述の協会と医療提携している機関は現在50施設有り、これらの医療機関を核として、今後、ネットワークの拡大を計る事が望まれている。

また、減圧症の治療等に理解のある高気圧治療に携わる医師やコ・メディカルの輪を拡大する必要もある。

このシステムについて概要を説明し、医療関係者の賛同を計りたい。